

- 漫筆漫歩
- 支援室の眼

t・f

私の教育遍歴

河上正秀

人文社会科学研究所教授

学生時代を通して崇敬できる教師はそう多くはないが、1960年代前半から70年代前半にかけて、当時キルケゴール研究で名高かった飯島宗享先生との出会いは忘れがたい。極度のアイロニストでもあった先生は、同時にユーモリストでもあって、研究会例会後の会食の際やご自宅の書斎で多くのことを学んだ。その中で、何度も聞いた忘れがたい進言「学生に対する授業理解度は三割で丁度よい」という言葉である。哲学や思想を壇上から講じる者は、授業の七割は学生に伝わらなくてよい、残る三割を理解できるような授業をすればよい、教師は職業的演技として超然とした部分をつねに有し、特に教養の授業では尊大な態度で接するのがよい、等々。当時は教授法の奥儀を知った思いがしたものである。

しかしその進言の内実がそれ以前からの伝統的な大学の教授法であり、時代に相即するものではないことに気づくのにはさほど

時間を要しなかった。その後教壇に立つ経験をもった者なら、大学教育における大きな変化はおよそ無視しがたいものがあつたからである。その決定的なものは、こと授業に関していえば、権威主義的な講義形式からの脱皮、教師と学生のあいだの距離の破格の短縮化であつた。あの進言のもつアイロニーやユーモアも、教師と学生との間の高低差があつてこそそのものだと感じさせられ、むしろ進言が懐かしく覚えたほどである。時代は、まさに戦後民主主義が一定の成果を獲得し、社会的に自己展開することになるいわゆる参加型の構成を不可欠としていた。また自主的主体主義や行動主義といった風潮が生き生きして、大学のカリキュラムの拡大深化も著しいものがあり、それに対応する教育現場の討議も実に豊かなものがあつた。専門分野は今なお固定的であつたと記憶するが、大学教育の根幹をなすと思われていた教養科目に関して

は既存の科目とは別メニューの工夫が各大学、さらには複数の教員間あるいは大学間で試行された。科目の豊富化とともに学生の主体的選択意識も旺盛な時代でもあった。当然のことだが、理解困難な授業では、自由に質問を提示し、それに対して教師も共に学び、共に知の理解を深めるという相互理解が前提とされた。総合科目の設置と教養科目の多様化への対応がどこの大学でも必須とされた時代である。

また学生との対話の素地が自然にあり、授業中も学生の表情が沈んでいると判断した時に発する冗談もよく通り、笑いが講義室を包んだ。かつて自分が学んだ頃にも確かに笑いはあったが、壇上からユーモアを振りまいてくれるのは理解のある教師に限るといった印象だったと記憶する。上から下への教育ではなく、教師と学生の対等、対時の関係と目線が成立してきたことをあらためて思わずにはいられず、そうした目線が将来的にも持続されるはずだという確信と手応えさえあったように思う。すでに大学の教養科目が高校時代にまで履修した授業の蒸し返しにすぎないとか、単に専門的な内容を薄めているだけだとかというアンケート上の不満もよく耳にしたが、何よりも選択の自由が大幅に容認されているそれなりに豊かなカリキュラムの構造のもとでは、「楽勝」と「敬遠」という選択肢が

ねに保証されていて、それなりの全体的バランスを保持していたのである。

しかしその後さらに時代が大きく変化したこともまた抗いがたい歴史的事実である。80年の首相の年頭教書が「技術立国としての日本」という見出しで新聞等で発表され、その後、世界的な科学技術の余波をまともに受けたかたちで、日本全体が今日まで持続することになるグローバリズムの波が訪れ始めたことである。その余波は、その後の90年代を通して国際的にも日本社会全体をコンビニエンス化の範型の進展と一体化し、今日のケータイ文化へと直進してきた歴史的進展を見事に跡づけている。同時にまた、それはその後の日本の大学の新たな動向を決定づけているように見える。なぜなら主体としての人間における自由と選択の文化領域のかなりの部分がサービス産業によって浸食され始め、主体という直接の実感の知覚幅が限りなく狭められたという事実である。そのことが気がかりで、ほぼ十年ほど前、当「フォーラム」(No.47・1997)に拙文を寄稿したこともある。何かと学生との奇妙な隔たりを痛感し、自存にして自尊的に見える当世学生気質の学生の自己「無限肯定」的風潮に、ソクラテスのアイロニーの問答法における「無限否定」の灯が消える危惧を覚えた時期である。何よりも冗談が通らず、笑わない学生が増え

た時期である。アイロニカルな物言いがむしろ危険だとさえ感じた。時あたかも「大綱化」が全国的に吹き荒れ、教養教育のカテゴリーや単位数が大きく動揺し、その後揺り戻しも含めて、大学教育に劇的な変化をもたらした頃でもある。当時、筑波大学でも教育課程委員会で大いに論議されたが、私自身は守旧派で通し、一部を除いてそれほどの目立った変化もなく、現在なおそのことを自分でも評価している。しかしその期を挟んで専門と教養との差異と関連が不透明になり、いまだその関係が揺れ動く、ないしは放置されたままであることを銘記しておいてよいであろう。

ところで、技術が文化ないしは知の位相を専門家の手に委ねる度合いに応じて、その知や文化を享受する大衆は主体的選択という実感から次第に遠のいていかざるをえない。冠婚葬祭といった人生の基本的な文化的儀礼だけが企業の手には委ねられるだけではないからである。教育の現場にあってはまた、その知や文化が脱主体的現象に巻き込まれていかざるをえない。今やレポートはその当該学生の実力の反映だと素直に考えている教師はもはやいない。すでにパソコンの中に積載された断片的な知の塊から幾つかの断片をコピーしたり、そこにあつた諸断片を組み合わせる技術さえもっていれば、短時間でレポートを完成させること

もできることになる。操作する主体の技術と文章創作能力とは別である。

教育とは元来、鈍足で即効性のないものであり、その意味ではこの分野ほど効率の悪いものはないといえるほどである。しかし技術の時代の中でその教育の実体は大きくそがれ始めている。少なくともそうした学生の「ニーズ」に応答するためには、彼らが自由選択主体からかなり隔たった地点に立っているとしか言いようのない現象が多々起きている。技術社会のなかで、もはやカリキュラムの多様化よりもむしろ単純化が求められてきている。その根拠をあげるなら、少子化に対する大学経営上の、特に人件費の制約という問題があり、学生の進学率の向上による偏差値の総体的低下現象という理由をあげることができるかも知れない。それらの理由も含めていえば、大学サイドのそうした時代傾向に相即するかのよう、カリキュラム上の選択肢は限られていた方がよいという「短絡志向」の学生の意見が決して少なくないのである。差異がそれとして見えていて、差異に拘った時代からはるか遠くへきた感があり、その意味でも学生の「ニーズ」が大きく変化してきていることである。選択を嫌うというより、すでに社会の方で構造的にコンビニやファミレスで需要の選択肢をコース分けして、食べやすくしてくれる出来合感覚

がますます浸透していくこともあり、却って選択にとまどう学生が増える傾向は確実に増えている。「わかりやすさは外から」がモットーの時代にあって、主体的選択などという日常行為の原則はすでに神話に化していると言ええる。

教育の現場における単なる主体性の復帰を今述べているのではない。技術に仮託せざるをえないのは学生だけでも、教育だけでもなく、社会が営む文化一般がそうなのであって、決して大学だけが例外ではない。しかし、そうだとすると、現代における教師と学生を目線をどこに求めることになるのだろうか？少なくとも教育の現場そのものが無くなることは教育の自滅でしかない。その意味で教師不在や学生不在という教育のヴァーチャルなマニュアル化や同じマニュアル化による教育活動の技術的トートロジーだけは避けなければならない。というのは、技術社会のトートロジカルな関係からは相互的な問答法が消滅する可能性が大きいからである。問う者と問われる者との関係の素地が仮想化しがちになり、問う者が問うことそれ自体を技術媒体に委託する傾向が増大する。学生と教師のあいだの存在確認なしには、そのもつ希少な相対関係なしには教育の論議の基礎は確実に失われるはずである。技術に仮託するうちに、問いや創作のモチーフ自体をも技術に丸

投げしてしまっていないだろうか。産湯と共に赤子を捨てる。

アイロニカルに言えば、今日こそ、かつて教職は聖職であるとされた地点に立ってしか見えない世界が開けたのではないだろうか。おそらく今後ますます教育が社会構造と相即して、教育のテクノクラートの技術管理による構造化は免れがたいであろうが、学生の動態の基礎をつねに鋭敏に感知することが不可欠だとすれば、おそらく限らない一・二人称的な関係の構築が新たに要請されてきていることになると言えようである。というのも、教育における学生と教師との三人称的な関係の構造化があまりにも先行し優位し過ぎていると思われてならないからである。この懸念そのものが神話だと指摘されるだろうが、「聞く」や「待つ」という他動詞の意義とともにいまだその有意義性を失ってはいないと、なおも＜信仰＞している者である。

まことに教育経営的ではない内容になってしまったが、退職予定者として何か言い残して去れ、という原稿依頼のご指示にお応えした次第である。諸先生方のご健勝とご活躍を祈念してやまない。

(かわかみ しょうしゅう／倫理学)